

1. 「診断病理」 J-Stage 掲載開始についてのお知らせ

この度、「診断病理」は、来春(2025年4月刊行の Vol. 42 No. 2)より J-Stage に掲載いたします。会員の皆様におかれましては、以下の点にご留意いただけますと幸いです。ご理解、ご協力のほど、よろしく願い申し上げます。

- ・冊子体は現行通り刊行いたしますが、移行期間を経て将来的には完全オンライン化を予定しています。その時期については改めてアナウンスします。

- ・論文採択後、冊子体の刊行と同時期に J-Stage へ掲載いたします。

※ DOI 付与あり、オープンアクセス

- ・ J-Stage への掲載料は学会負担です。

※著者の先生方がご負担される掲載料は現行のままとなります。

- ・著者の方は、下記リンクより「投稿規定」「症例報告における患者情報保護に関する指針」「投稿に際しての注意事項」について、今一度ご確認ください。

参照 HP:

<https://www.pathology.or.jp/kankoubutu/jjdp-20240826.html>

2. 第 47 回 (令和 6/2024 年) 日本病理学会認定施設および登録施設の認定申請について

A: 日本病理学会「認定施設」の認定申請(新規)について
第 47 回 (令和 6 / 2024 年) の認定審査のための申請を下記の通り受付けます。申請ご希望の施設は、書類を HP よりダウンロードの上、申請してください。申請には前年の剖検例が剖検輯報に掲載されていることが必須条件です。

1. 申請に必要な書類

- 1) 日本病理学会認定施設認定申請書 1 通
- 2) 認定施設認定申請書資料 1 通

2. 申請書類提出先 (郵送のみの受付)

〒101-0041

東京都千代田区神田須田町 2-17 神田 IN ビル 6 階

日本病理学会事務局 認定施設申請受付係

TEL 03-6206-9070

3. 申請締切

2024 年 10 月 31 日 (木) 消印有効

4. 認定施設の主な条件

常勤の病理専門医研修指導医が最低 1 名いること。

8 体程度/年の剖検があること。

NCD を通じて剖検データを登録していること。

※申請をする施設は、2023 年 (1 月 ~ 12 月) の剖検データを、その施設として登録完了後、施設申請書類を病理学会へ送付してください。

剖検データは NCD にて登録受付中です。登録されていない場合、申請は認定されません。

B: 日本病理学会「登録施設」の認定申請(新規)について

第 47 回 (令和 6 / 2024 年) の登録施設確認を行うにあたり、下記により確認申請を受付けます。申請ご希望の施設は、書類を HP よりダウンロードの上、申請してください。申請には剖検例が剖検輯報に掲載されていることが必須条件です。

1. 申請に必要な書類

- 1) 日本病理学会登録施設確認申請書 1 通
- 2) 日本病理学会登録施設被登録承諾書 1 通
- 3) 登録施設確認申請書資料 1 通

<注意>

1) は既に認定施設として認定されている大学の病理学講座・病理部や市中病院の病理部等が記入してください。

2) はこれから登録を受けようとする病院が記入してください。

3) はこれから登録を受けようとする病院の専任又は非専任の病理医が記入することが望まれます。

※ 1) ~ を 3) 一緒の封筒でお送りください

2. 申請書類提出先 (郵送のみの受付)

〒101-0041 東京都千代田区神田須田町 2-17

神田 IN ビル 6 階

日本病理学会事務局 登録施設申請受付係

TEL 03-6206-9070

3. 申請締切

2024 年 10 月 31 日 (木) 消印有効

4. 登録施設の主な条件

- 親施設となる認定施設と協力関係を結ぶ必要がある。
- 1体程度/年の剖検があること。
- NCDを通じて剖検データを登録していること。

※申請をする施設は、2023年(1月～12月)の剖検データを、その施設として登録完了後、施設申請書類を病理学会へ送付してください。

参照 HP:

<https://www.pathology.or.jp/senmoni/senmoni/20240815senmoni.html>

3. 病理専門医更新

病理専門医資格更新の本年度該当者には、学会事務局より申請方法について8月21日にメールでご連絡をしております。ご不明な点がございましたら事務局までご連絡ください。ご自身の更新該当年は、会員システムより各自ご確認が可能です。更新のご希望がない場合も、必ず事務局宛にご一報ください。病理専門医資格保留中の方で本年度に更新(復帰)申請を希望される場合は、日本病理学会事務局までご連絡ください。必要書類を送付いたします。

提出締め切り:

2024年10月31日(木)消印有効(郵送申請)

2024年11月1日(金)午前9:00(電子申請)

4. 口腔病理専門医更新

口腔病理専門医資格更新の本年度該当者には、学会事務局より必要書類を8月下旬に送付いたしました。該当であるにもかかわらず、必要書類が送付されていない場合は、事務局までご連絡ください。ご自身の更新該当年は、会員システムより各自ご確認が可能です。更新のご希望がない場合も、必ず事務局宛にご一報ください。口腔病理専門医資格保留中の方で本年度に更新(復帰)申請を希望される場合は、日本病理学会事務局までご連絡ください。必要書類を送付いたします。

提出締め切り:

2024年10月31日(木)消印有効(郵送申請のみ)

5. 分子病理専門医更新

分子病理専門医資格更新の本年度該当者には、8月下旬に学会事務局より申請方法についてメールでご連絡をしております。ご不明な点がございましたら事務局までご連絡ください。ご自身の更新該当年は、会員システムより各自ご確認が可能です。更新のご希望がない場合も、必ず事務局宛にご一報ください。分子病理専門医資格保留中の方で本年度に更新(復帰)申請を希望される場合は、日本病理学会事務局までご連絡ください。

提出締め切り:

2024年10月31日(水)23:59(電子申請)

6. レジナビフェア 2024in 東京」活動報告

病理医・研究医の育成とリクルート委員会の主要な活動の1つとして、総勢11名【藤井・上田(横浜市大)、大橋(東京医科歯科大)、佐藤(埼玉医大)、小川(国保旭中央病院)、前田(名古屋大)、竹内(京都大)、宮崎・小林(岐阜大)、加藤・本間(病理学会事務局)】で、6月16日(日)レジナビフェア2024 in 東京(東京ビッグサイト)に参加した。十分なコロナ対策のもとに実施された。

病理医の医学生への認知度はかなり上がっており、11時の開始直後から学生・研修医の訪問が途切れることはなかった。最終的には34名の医学部学生と研修医が、病理医・病理研究者としてのキャリア形成や業務内容に関する話を聞きにブースを訪問してくれた。今年も5年生が16名と最も多かった。男女比は20:11で今年は男性優位であった。関東地区からの学生が多く、国公立と私立大学の医学生の割合はほぼ同じであった。

中には北海道や宮崎県からの来訪者もあった。個別の相談がかなり多く、30分以上面談をしていった学生も多数

いた。診断医を目指す来訪者には病理を専攻した場合の勤務時間や最終進路に関する柔軟性を強調して話をしている。今年は、女性病理医2名(佐藤、上田の各先生)に参加していただき、女性の視点から細やかな対応をしていただいた。レジナビ全体の出展や参加者はコロナ前よりも少





し規模が大きくなった様に思われた。当日お会いしたみなさん、数年後に病理学会総会でお会いしましょう。多くの若手医師に日本の将来の医学研究を病理の立場から背負ってほしいものです。業務後にささやかな反省会をおこない、若手リクルートの決意を新たにしました。

(病理医・研究医の育成とリクルート委員会委員長
宮崎龍彦)

参照 HP :
<https://pathology.or.jp/gakuken/seminar.html>

7. 2024年英国病理学会参加報告

2024年6月18日から20日にイギリス・シェフィールドで開催された英国病理学会に参加した研究者から報告書が届きました。

P4からP7をご参照ください。

英国病理学会（Sheffield Pathology 2024）派遣報告書

浜松医科大学医学部医学科 腫瘍病理学講座
酒井 康弘

このたび、日英交流事業の一環として、2024年6月18日～20日にイギリス・シェフィールドで開催された英国病理学会（Sheffield Pathology 2024）に参加する機会をいただきました。今回は、英国病理学会と大会事務局の間で行き違いがあったようで、speaker invitation がなかなか届かなかったり、当初の programme に私たちの発表枠がなかったりと、学会直前まで気を揉みましたが、無事に invited speaker として参加し、英国病理研究者と交流を深めることができました。

シェフィールドはロンドンの St. Pancras 駅から East Midlands Railway で2時間ほどの距離にあります。めばしい観光地は少ないものの、街全体にシェフィールド大学（University of Sheffield）の関連施設が林立しており、勉学研究に励むのに好適な環境が整えられている印象を受けました。レンガ造りの伝統的な建築物が建ち並ぶ中で、2022年12月に完成したばかりのひととき近代的なシェフィールド大学のホール“The Wave”にて本学会は開催されました。

英国病理学会は冬と夏の年2回開催され、前者は基礎病理学の、後者は病理診断学の研究発表を中心にプログラムが組まれています。今回は microbiome が目新しいテーマで、病理学を疫学・細菌学方面から有機的に統合させた斬新なシンポジウムでした。加齢・自己免疫疾患・癌の発症を microbiome 等の環境因子から紐解いていく内容は、さすが疫学発祥の地ならではの切り口で、新しい病理学に驚きと感銘を覚えました。Oral presentation のセッションでは、trainee（病理専門医取得前の専攻医）や undergraduate（学部生）が積極的に発表していたのが印象的で、癌や変性疾患の immunoprofile/genetic profile の解析や AI 研究などの成果を、座長の教授陣たちを相手に果敢にアピールするエネルギー溢る姿勢に圧倒されました。一方で、海外のプレゼンテーションは大きなジェスチャーを交えて緩急自在に話す様子を想像していましたが、実際は持ち時間の中で研究結果や考察を早口でぎっしり詰め込むスタイルの先生が多く、意外に感じました。

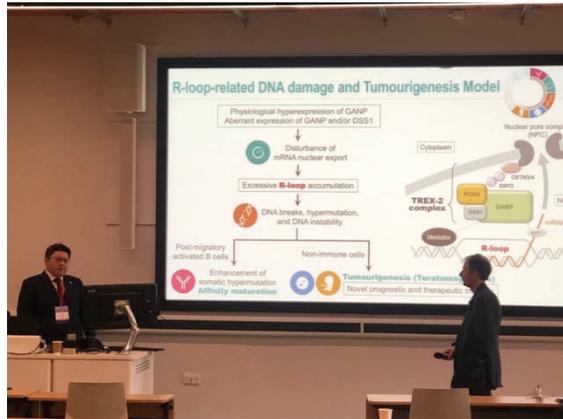
私も学会1日目の午後に“Elucidation of lymphocyte dynamics and development of a tumourigenesis model based on the GANP/DSS1 family”という演題で、B細胞ダイナミクスから発癌・抗がん剤感受性機序まで、転写共役型 DNA 傷害を基軸として幅広く講演しました。座長は University of Aberdeen の Prof. Murray で、数々の著名な論文を執筆されている篤学者を前に緊張しましたが、とても好意的な質問やコメントをいただき、今後の研究の大きな励みになりました。講演後にもわざわざ私の所に質問にみえた先生もいらっしや、大変有意義な意見交換ができました。

セッションの合間には、英国病理学会理事長の University of Edinburgh の Prof. Arends や、次期理事長の University of Liverpool の Prof. Coupland よりご挨拶いただき、温かい歓迎の言葉を賜りました。今年の日本病理学会総会にて英国若手研究者として発表された Dr. Wong には、今度は私たちが色々と心遣いをいただきました。また、英国には病理専門医を目指す若手が集う subcommittee があり、その代表の Dr. Field からは日本の病理専門医制度について矢継ぎ早に様々

な質問を受けました。「研究と診断は両立できるだろうか?」「イギリスでも病理解剖数が減少していて経験が得にくい」「全身臓器の病理像を勉強するのが大変」など、国は違えど若手病理医で皆同じ悩みを抱えているのだと連帯感が生まれました。

2日目の夜には Conference Dinner にご招待いただきました。ホテルから会場までの道すがら、恐れながら Prof. Coupland にシェフィールドの街並みや会場内を案内していただきました。ディナー会場の Cutler's Hall (刃物商会館) は築 190 年以上の grade II* (日本の重要文化財に相当) のレンガ造りの趣がある建築物で、そちらでおいしいディナーを満喫するのかもしれないと思いきや、途中からロックバンドによる生演奏に合わせて重鎮の先生方が踊り出したのにはさすがに驚愕しました。理事長の Prof. Arends までもがジャケットを脱いでダンスに興じており、日本病理学会ではまず見られない光景に呆然としましたが、普段は紳士淑女たる英国人のお茶目な一面を垣間見たような気がします。

最後に、今回の派遣に際し理事長の小田義直先生、国際交流委員会委員長の都築豊徳先生、日本病理学会事務局の皆様にご挨拶申し上げます。また、共に英国派遣に参加した久留米大学の竹内真衣先生とは、学術奨励賞の他、100 周年記念病理学研究新人賞も同時に受賞しており、色々ご縁を感じました。今後も日本と英国の病理学者の交流を深化させるべく、力を合わせて取り組んでいきたいと思っております。



左上：Sheffield Pathology 2024 の会場（シェフィールド大学 “The Wave”）。右上：小弟の発表の様子と座長の Prof. Murray。左下：会場内にて（右から竹内真衣先生と小弟）。右下：Cutler's Hall での Conference Dinner。

Sheffield 滞在記（英国病理学会派遣報告書）

久留米大学病理学講座 竹内真衣

2024年6月18から20日にシェフィールド大学で開催された Sheffield Pathology 2024 に参加させて頂きました。派遣が決まるまで恥ずかしながらシェフィールドがどこにあるのかも知りませんでした。英国の中心部にあり5番目に人口の多い都市であるという最小限の情報のみで現地に向かいました。もう一人の派遣者である浜松医科大学の酒井先生とともにロンドンのヒースロー空港に降り立ち、3時間弱の電車の旅でシェフィールドに向かいました。空港から遠い事を心配していましたが、ロンドン市街中心部からシェフィールド駅まで直通電車があり、時間も正確で快適な移動でした。6月のシェフィールドは涼しく、昨今蒸し暑い日本と比べてとても快適な気候でした。時間がなく会場周囲のみの散策でしたが、歴史を感じる建築物が多く美しい街並みでした。

会場のシェフィールド大学は歴史ある大学で、坂の多い広いキャンパスに多くの建物が立ち並んでいました。学会は“The Wave”という新しい建物で開催され、概ね3セッションが同時進行する形でした。平日開催ということもあり人数は日本病理学会総会よりも少ない印象で、若い参加者が多いように見えました。色々なセッションを覗いてみましたが、診断のピットフォールなどのプラクティカルな話から研究まで多様な内容でした。研究発表はデジタルパソロジー関係が多く、日本との傾向の違いを感じました。スライドは文字を少なく図で説明するのがよい、と教えられてきましたが、多くの演者が文章を多めに配置して説明するスライド構成が印象的で参考になりました。

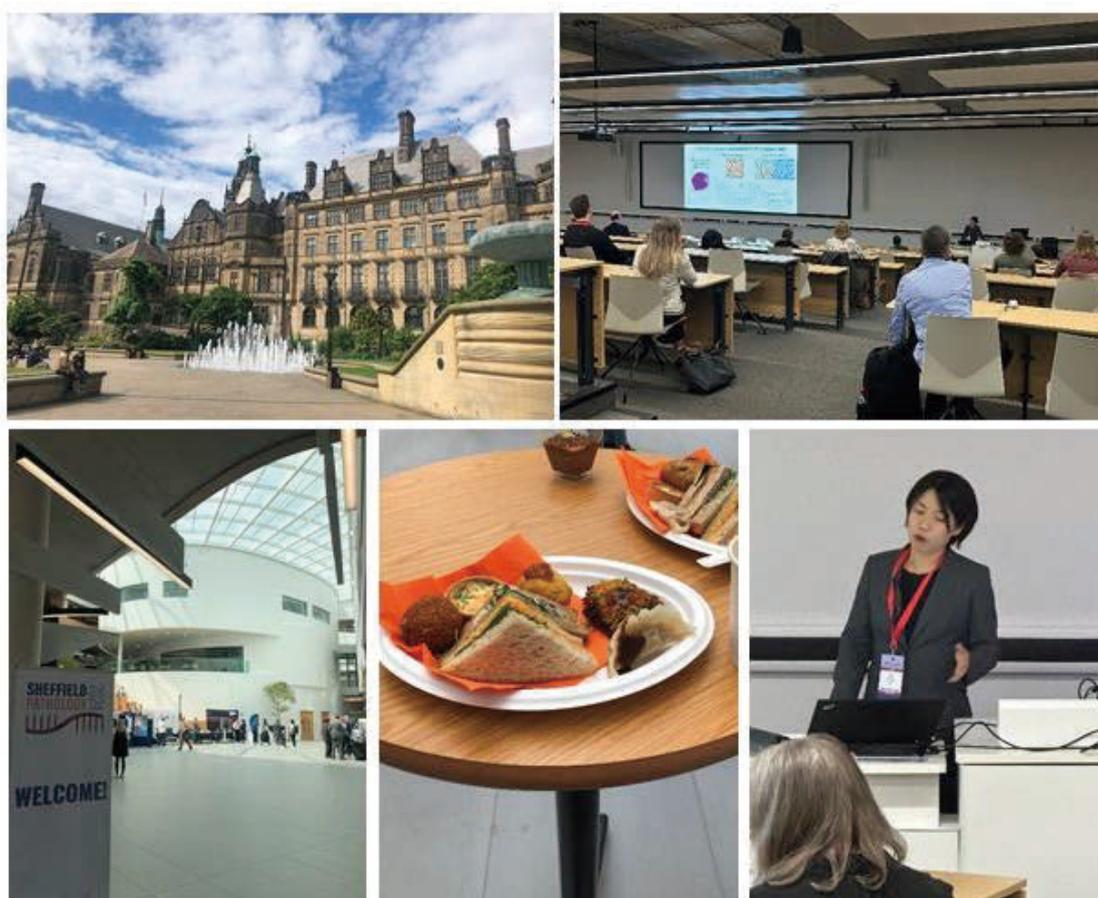
ランチョンセミナーはなく、昼食休憩にケータリングの軽食がビュッフェスタイルで並べられ、好きなものを手をつまんで取っていくスタイルで新鮮でした。休憩中に学会会長の Arends 先生や副会長の Coupland 先生にご挨拶の機会を頂き、3月の日本病理学会総会に派遣された Wong 先生ら英国のジュニア病理医と交流の機会を得ました。Wong 先生は日本での滞在与交流を大変楽しんでくれたそうで、滞在中色々親切にしてくださいました。我々も次回の2025年日本病理学会総会に英国から派遣される先生と是非交流を深めたいと思います。

私は Plenary Session で成人 T 細胞白血病・リンパ腫の免疫微小環境について免疫染色と空間トランスクリプトーム解析による研究内容を発表させて頂きました。他の演題と毛色が異なるため不評ではないかと心配しましたが、温かく受け入れて頂き、無事発表を終えられて安堵しました。フロアからの質問はなく座長 2 名から質問を頂きました。質問を理解し私なりにお答えしたのですが、専門分野が異なる先生方の質問がやや予想外の内容で説明が不十分になったことが反省点です。貴重な経験として今後の学会発表に生かしたいと思います。

2日目の夜は数世紀の伝統のある Cutler's Hall で開催された Conference Dinner に招待い

いただきました。Cutler は人名ではなく刃物職人を指すそうで、シェフィールドは刃物産業で有名だそうです。歴史あるカトラリーやナイフなどが多く展示されていました。英国では伝統的らしいチキンのロースト、ポテト、野菜をメインとした料理を大変美味しく頂きながら、若手の先生たちと楽しくお話をさせていただきました。翌朝が早いので途中で失礼しましたが、地元のロックバンドの生演奏もあり遅くまで盛り上がっていたようです。

学会 3 日目の早朝にシェフィールドを発つという短い滞在期間でしたが、とても有意義な経験をさせていただきました。今後の研究・診療に生かして更に精進を重ねたいと思います。このような機会を与えてくださいました日英の関係者の皆様に心より感謝申し上げます。酒井先生と共に今後の日英交流に少しでも貢献させて頂ければ幸いです。



上段左：Sheffield の風景、上段右：会場内の様子

下段左：“The Wave”の内観、下段中：会場の昼食、下段右：演題発表中の筆者